第６１回青森県漁村青壮年女性団体活動

# 実績発表大会資料

令 和 ２ 年 １ 月

青　　森　　県

# 目　　次

１　次　　第　　１

２　開催要領　　２

３　発表課題

（１）家族で、地域で「健康づくり」
　　－養殖ホタテ日本一を支えて－
　　平内町漁業協同組合女性部　　能登谷　いづみ　　４

（２）奥入瀬川のサケ親魚確保のリスク軽減と早期群造成
　　－海と川の絆－
　　奥入瀬・百石サケマス増殖対策協議会　　沖田　　考平　　１２

（３）車力しじみ生産部会の挑戦
　　－これまでの軌跡とこれからの展望－
　　車力しじみ生産部会　　成田　　邦福　　２０

（４）「海峡ロデオ大畑」の出航
　　－漁師から始まる地域振興－
　　海峡ロデオ大畑　会長　　佐藤　　敏美　　２７

# 第６１回青森県漁村青壮年女性団体活動実績発表大会

## 次　　第

日 時：　令和２年１月２２日（水）
　　１３時００分～１６時３０分
場 所：　県民福祉プラザ４階　県民ホール

| | | |
|---|---|---|
| １ | 開　　会 | １３時００分 |
| ２ | 知 事 挨 拶 | |
| ３ | 来 賓 祝 辞 | |
| ４ | 漁業士認定式 | １３時１５分 |
| ５ | 青森県水産賞表彰式<br>主催：一般社団法人　青森県水産振興会 | １３時３０分 |
| ６ | 活動実績発表 | １３時４５分 |
| ７ | 審　　査 | １４時５０分 |
| ８ | 講　　評 | １５時５０分 |
| ９ | 表　彰　式 | |
| 10 | 閉　　会 | １６時３０分 |

# 第６１回青森県漁村青壮年女性団体活動実績発表大会開催要領

１　目　　的

　県内漁村青壮年女性団体の代表者が一堂に会し、活動実績の発表を通して知識の交換と活動意欲の向上を図り、沿岸漁業の振興及び漁村生活改善等に寄与することを目的とする。

２　主　　催

　青 森 県

３　参集範囲

　県内の漁村青壮年女性団体員、漁業協同組合員、市町村水産担当者等の水産業関係者

４　会　　場

　県民福祉プラザ４階「県民ホール」（青森市中央３丁目２０－３０）

５　開催日時

　令和２年１月２２日（水）１３時～１６時３０分

６　スケジュール

| 時　　間 | 行　　事 | 備　　考 |
|---|---|---|
| １３:００ | 開　会 | |
| １３:１５～１３:３０ | 漁業士認定式 | 指導漁業士移行者２名 |
| １３:３０～１３:４５ | 水産賞表彰式　※１ | |
| １３:４５～１４:４５ | 活動実績発表 | 発表時間１５分／１人　４課題 |
| １４:５０～１５:４５ | 審査等　※２ | |
| １５:５０～ | 講評、結果発表、表彰式 | |
| １６:３０ | 閉　会 | |

※１　（一社）青森県水産振興会主催

※２　審査の間、（一社）青森県水産振興会主催により講演会が開催される

（講師：八戸漁業指導協会　会長理事　熊谷　拓治　氏）

７　審査及び表彰

（１）発表課題について、審査委員が審査を行い、優秀賞及び優良賞を決定する。

（２）優秀賞及び優良賞について、表彰状を授与する。

（３）審査の基準については別に定める。

8　審査委員

| | | |
|---|---|---|
| 審査委員長 | 青森県農林水産部水産局長 | 對　馬　廉　介 |
| 審査副委員長 | 青森県農林水産部次長 | 山　田　　泉 |
| 審査委員 | 青森県漁業協同組合連合会代表理事会長 | 三津谷　廣　明 |
| | 青森県信用漁業協同組合連合会代表理事会長 | 西　山　里　一 |
| | 青森県漁協青年部連絡協議会長 | 後　藤　石　雄 |
| | 青森県漁業士会長 | 田　中　張　寛 |
| | 青森県漁協女性組織協議会長 | 葛　西　恭　子 |
| | 青森県農林水産部水産局水産振興課長 | 松　坂　　洋 |
| | 青森県農林水産部水産局漁港漁場整備課長 | 竹　内　保　志 |
| | 青森県農林水産部総合販売戦略課長 | 齋　藤　直　樹 |
| | (地独)青森県産業技術センター水産総合研究所長 | 野　呂　恭　成 |
| | (地独)青森県産業技術センター内水面研究所長 | 菊　谷　尚　久 |
| | (地独)青森県産業技術センター食品総合研究所長 | 須　藤　健　児 |
| | (地独)青森県産業技術センター下北ブランド研究所長 | 松　原　　久 |

9　発表課題、団体名及び発表者

| 発表順 | 課　　題　　名 | 発　　表　　者 |
|---|---|---|
| 1 | 家族で、地域で「健康づくり」<br>－養殖ホタテ日本一を支えて－ | 平内町漁業協同組合女性部<br>能登谷　いづみ |
| 2 | 奥入瀬川のサケ親魚確保の<br>リスク軽減と早期群造成<br>－海と川の絆－ | 奥入瀬・百石サケマス<br>増殖対策協議会<br>沖田　考平 |
| 3 | 車力しじみ生産部会の挑戦<br>－これまでの軌跡とこれからの展望－ | 車力しじみ生産部会<br>成田　邦福 |
| 4 | 「海峡ロデオ大畑」の出航<br>－漁師から始まる地域振興－ | 海峡ロデオ大畑<br>会長　佐藤　敏美 |

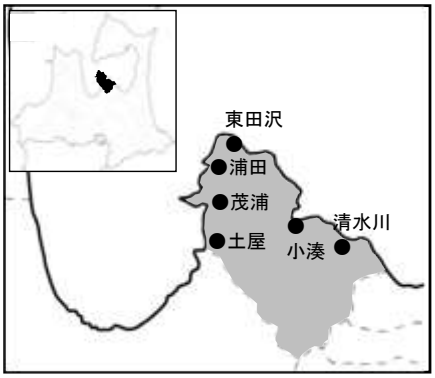
## 家族で、地域で「健康づくり」

－養殖ホタテ日本一を支えて－

平内町漁業協同組合女性部
能登谷　いづみ

１．地域の概要

私たちが住んでいる平内町は、夏泊半島に位置する人口約 11,000 人の「養殖ホタテ日本一」の町である（図－１）。




図－１　平内町の位置

この地域は、夏泊（なつどまり）半島や夜越山（よごしやま）森林公園を抱え、四季を通じて観光客が絶えず訪れる。特に夏泊半島には、国の天然記念物に指定されている「ツバキ自生北限地帯」や、「日本の渚百選」に選ばれている「椿山海岸」（写真－１）という名所がある。また、冬にシベリアから渡来するオオハクチョウとその渡来地である「浅所海岸」は、国の特別天然記念物「小湊のハクチョウおよびその渡来地」に指定されている（写真－２）。

最近では、町で水揚げされた養殖ホタテガイについて学んで買うことができる「ほたて広場」において、新鮮でおいしいホタテガイを味わえる「新ご当地グルメ・平内ホタテ活御膳」が多くの観光客の人気を博している。

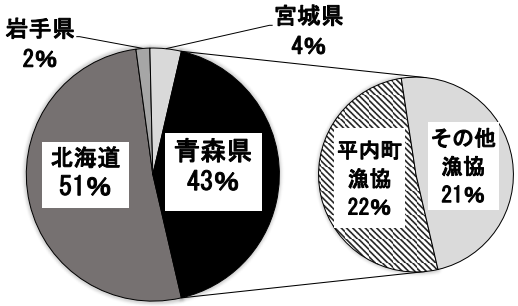
写真－１　「椿山海岸」

写真－２　「小湊のハクチョウおよびその渡来地」である「浅所海岸」

２．漁業の概要

私たちが所属する平内町漁業協同組合は、以前、町内にあった 6 つの漁協の脆弱な経営基盤を強化するため、昭和 45 年に合併・設立され、今年で設立 50 周年を迎えた。ま

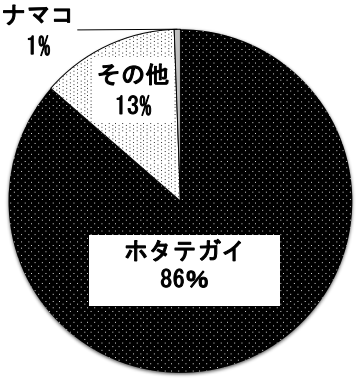
た、県内で先駆けて、「つくり育てる漁業」として「ホタテガイ養殖」を始め、現在では、陸奥湾の養殖ホタテガイの水揚げ数量の約半数を占めており、全国の単一漁協では、「日本一」の水揚げ数量を誇っている（図－２）。



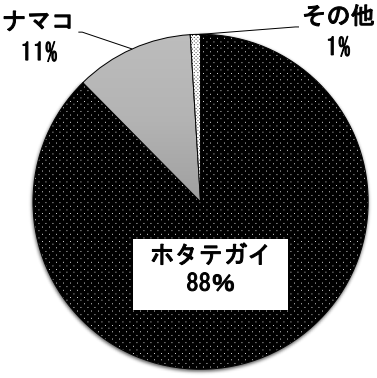

**国内養殖ホタテガイ水揚げ量　210,548トン**
**（H26～H28 農林水産統計）**

図－２　全国の養殖ホタテガイ生産における平内町漁業協同組合が占める割合

組合員数は平成 30 年 11 月現在、正組合員 708 人、准組合員 126 人の計 834 人で構成されており、主な漁業は、ホタテガイ養殖業とホタテ・ナマコ桁網漁業、カレイ・ナマコ刺網漁業等である。平成 30 年の水揚げ数量は約 4 万 260 トン、うちホタテガイが約 3 万 9,963 トンで 86%、水揚げ金額は約 75 億 7,500 万円、うちホタテガイは 66 億 8,600 万円で 88%となっている（図－３）。




**水揚げ数量　40,260トン**




**水揚げ金額　75億7,513万円**

図－３　平成 30 年の平内町漁業協同組合の水揚げ数量と金額

３．研究グループの組織と運営

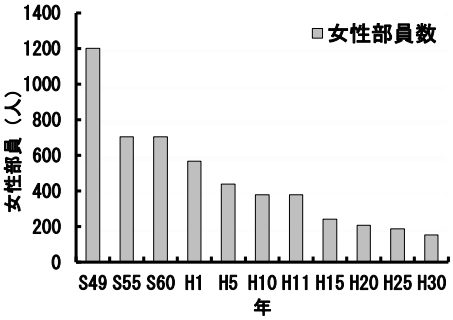
私たち「平内町漁業協同組合女性部」は、昭和 49 年に「平内町漁業協同組合婦人部」として 6 支部（土屋、茂浦、浦田・稲生、東田沢、小湊、清水川）・部員数 1,200 人で発足した。現在の部員数は 152 人（土屋 10 人、茂浦 6 人、浦田・稲生 27 人、東田沢 17 人、小湊 14 人、清水川 77 人）で構成され、うち 60～90 歳代の高齢者が 64%を占めている。組織は部長と副部長を中心に各支部の代表者等計 18 人で役員会を構成し活動している（表－１）。

表－１　女性部の年代別人数と役員構成

| 年　代 | 人　数 |
|---|---|
| 30歳代 | 1 |
| 40歳代 | 14 |
| 50歳代 | 42 |
| 60歳代 | 48 |
| 70歳代 | 38 |
| 80歳代 | 8 |
| 90歳代 | 1 |

| 役　職 | 人　数 |
|---|---|
| 部　長 | 1 |
| 副部長 | 1 |
| 各支部長（理　事） | 6 |
| 理　事 | 8 |
| 監　事 | 2 |

これまで、女性部はさまざまな活動を積極的に行ってきた。その中の代表的なものとして、漁業者がゆとりある生活をするための休漁日と操業時間の制定の要望活動、ホタテガイを使った地域特産品としての加工品開発（「ホタテ長寿めん」や「ホタテ貝柱（改良版）」等）、県、町および県漁連と共にホタテガイの価格安定と消費拡大のためのＰＲ活動等が挙げられる（写真－３）。



図－４　女性部員数の推移

現在は、高齢化や会員の減少（図－４）が進んでいるものの、できる限り「無理なく負担のない範囲」で精力的に活動を行っている。

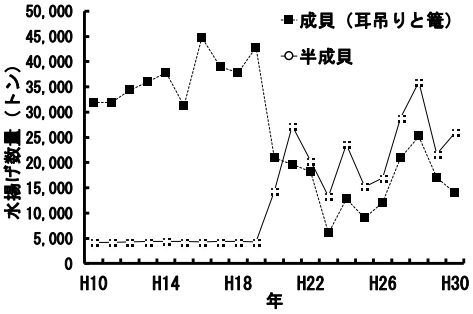
活動費については、漁協からの助成金と会員からの会費で賄われている。

写真－３　活動状況

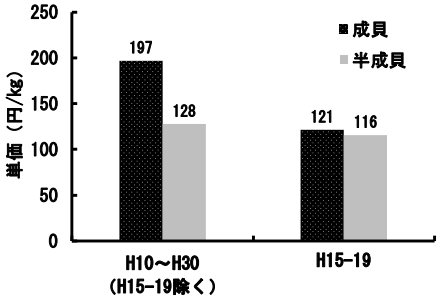
４．研究・実践活動取組課題選定の動機

現在、私たち女性部は「私たちの子供や孫の代まで続くホタテガイ養殖業」を活動目標としており、約 50 年培ってきた「ホタテガイ養殖」を自分たちの子や孫の世代へ守り繋げてほしいという願いが込められている。

最近、ホタテガイの価格と海洋環境の変化により、平成 20 年からの養殖形態は養殖期間が長い成貝から、採苗から 1 年で出荷できる半成貝へ変化している（図－５）。通常、成貝の単価は半成貝の単価の約 1.5 倍で（図－６）、半成貝主体で生計を立てようとすると、養殖するホタテガイの量は約 1.5 倍になり、それに伴って作業時間が増加する。養殖を行う漁業者の大半は家族経営であるため、これまで以上に働かなければ、生活を維持できなくなる。その結



図－５　平内町漁協における半成貝と成貝の水揚げ数量の推移



図－６　平内町漁協における半成貝と成貝の平均単価

果、私たちの日常における家事を行う時間が減少し、食事等も手軽なものになってしまいがちである。また、40～50 歳代の働き盛りの漁業者の中には、生活習慣から糖尿病や脳卒中といった病気にかかる漁業者も見られる。

ホタテガイ養殖には「健康」がもっとも大切であり、病気や怪我に負けない体づくりが必要である。そのため、私たちは忙しい中でも手軽に家庭の味を味わえる健康を考えた加工品開発と日常の食生活から生活習慣病の予防等が必要と考え、養殖を支えるため「健康づくり」に関する活動を始めた。

## ５．研究・実践活動状況および成果

### （１）手軽に家庭の味を味わえる健康を考えた加工品開発

私たちは、忙しいホタテガイ養殖の合間でも手軽に食事ができ、家庭の味を味わうことができる「ほたて味噌（平成 6 年頃）」と「ほたて佃煮（平成 9 年頃）」を開発した（写真－４）。

写真－４　「ほたて味噌」と「ほたて佃煮」

これらの商品は、平成 9 年から開催され毎年１万人以上が来場する「ほたての祭典」でも販売し、購入者から好評を得ている。また、平成 29 年には、東京で開催した「青森ほたて料理発表会」へ出品し、参加者から高い評価を得た（写真－５）。

この「ほたて味噌」は、部員が家庭で作っていたレシピを基に、減塩等の改良を加え製造・販売している。平成 16 年には県の「食の文化伝承財」に認定・登録され、県産品を活用し伝承活動を積極的に行っている団体として、県知事より表彰を受けた（写真－６）。

写真－５　「ほたて味噌」と「ほたて佃煮」の出品状況

写真－６　表彰状

（２）「健康づくり」に関する活動

平成 25 年に厚生労働省が公表した「平成 22 年全国市区町村別生命表」において、平内町の平均寿命は、全国順位で男性が下から 37 位、女性が下から 30 位であった。今後の対応について、同町の健康増進課と県の東地方保健所が打合せをした際、「町の基幹産業を担う農業者と漁業者で比較すると、漁業者には生活習慣指導があまり行き届いていない。」ことが問題視された。

ア　成人男性 250 人に対する健康アンケート（平成 25 年　小湊地域）

平成 25 年に町と県は、小湊地域において、成人男性 250 人に健康に関するアンケートを行い、同地区の漁業者とその他町民を比較した「平内町の食生活から見た生活習慣病予防のための一考察－実態調査報告書－」として取りまとめた（写真－７）。その結果は以下のとおりであった。

①　菓子パン、加糖コーヒーの摂取が多い。

②　養殖作業を優先するため、昼食欠食率が高く、栄養バランスや規則的な時間に食事をとるといった健康行動が低い。

③　「受動喫煙」の認知度が低く、知識の普及が不可欠。

④　特定健康診断受診者が少ない。

写真－７　　報告書

イ　「漁師の健康改善大作戦事業・漁師の健康を考える会」への参加

私たちは平成 26 年から町の健康増進課と県の東地方保健所の指導を受けながら、地域ぐるみでホタテガイ養殖を子や孫の世代へ守り繋げるため、健康課題共有と健康づくり支援を目的にした町と県の共働による「漁師の健康改善大作戦事業・漁師の健康を考える会」に参加している。構成員は、地域の漁業者と漁協職員、町保健協力員、町食生活改善推進員、消防団、地域住民、私たち女性部からなる。

この会では減塩や野菜摂取の重要性を知るための試食をしながら、「健康づくり」

写真－８　「漁師の健康を考える会」　（上：小湊、下：茂浦）

について多岐にわたり活発な話し合いを行ってきた。平成 26 年から今年までで小湊地区では計 13 回、茂浦地区では計７回開催している（写真－８）。

私たちは、この会で学んだ知識を地域で共有するため、地域の行事や立ち話なども活用し以下の活動を行った。

① 特定健康診断を受けるよう自身の家族や個々の地域住民へ受診勧奨訪問。

② 加糖コーヒーの代わりにお茶や無糖コーヒーの奨励。

③ 減塩・野菜を多く摂取することの重要性と健康づくりのための献立の普及。

④ 禁煙の重要性。

ウ これまでの取り組みに対する変化

地域の健康に対する意識が変わり、漁協では以下のような取り組みの開始につながった。

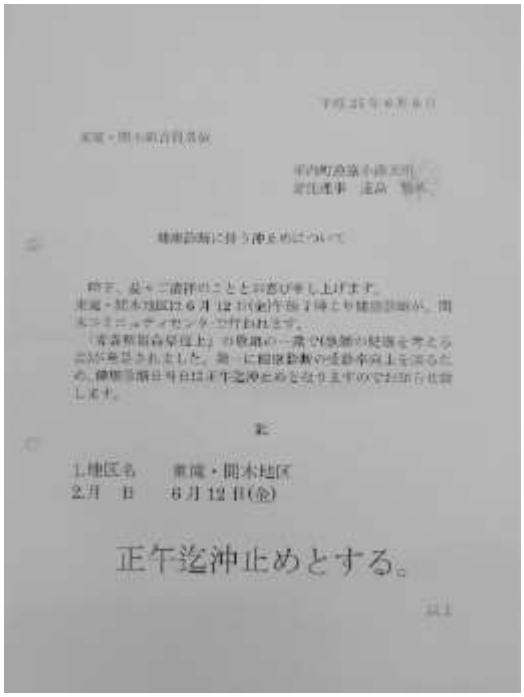
① 小湊支所では、特定健康診断に伴う「沖止め」を制定したことにより（写真－９）、漁業者の特定健康診断受診率が向上した（図－７）。

② 漁協では、加糖コーヒー等のソフトドリンクを減らし、お茶や無糖コーヒー等を多く飲むようになった。

③ 漁協本所・小湊支所の敷地内が禁煙となった。

また、地域の漁業者からは以下のような話があった（写真－１０）。

① 家族で糖分の多いソフトドリンクや味噌、醤油の量を減らしている。

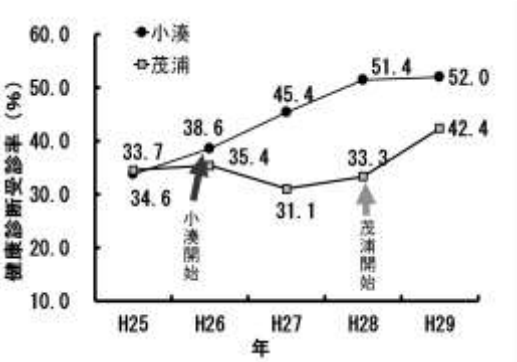


工地区名　東浦・間木地区
2月　日　6月12日(金)

正午迄沖止めとする。

以上

写真－９　特定健康診断受診に伴う沖止め文書




図－７　小湊・茂浦地区の特定健康診断受診率（東地方保健所データ使用）

写真－１０　「漁師の健康を考える会」で発言する漁業者

② 地域の集まりで「塩分控えているか」等の健康に関する話題が多くなり、地域に健康に関する知識が浸透していると感じている。

この活動は、マスコミや保健師が参加する研修会等でも「地域で取り組む健康づくり」先進事例として紹介されている（写真－１１）。

写真－１１　「漁師の健康を考える会」の取り組みを伝える広報誌・新聞記事
左：「平成２９年度地域活性化事例集・特集編」（一般財団法人地域活性化センター）
右：東奥日報記事（平成３０年２月２１日朝刊）

６．波及効果

「ほたて味噌」と「ほたて佃煮」の手軽さとおいしさを再認識し、新しいパッケージを考え（写真－１２）、新たなアイデアで販売を模索する部員も出てきている。また、「ほたての祭典」では、家庭の味である「ほたて汁」や「ほたてカレー」を振る舞っている（写真－１３）。その際、子や孫の世代の若い漁業者が使用する調理器具の準備等をするため、彼らと交流する機会も増え、地域ぐるみのコミュニティも確立されつつある（写真－１４）。

写真－１２　「ほたて味噌」の新しいパッケージ

写真－１３　「ほたての祭典」で振る舞うほたて汁とほたてカレー

写真－１４　「ほたての祭典」の若い世代の漁業者との共同作業

「健康づくり」に関する活動では、平内町漁協本所と全支所の事務所内が完全禁煙となったことや、小湊や茂浦以外の地域の漁業者も加糖コーヒー等のソフトドリンクからお茶や無糖コーヒーを多飲する傾向が見られ、少しずつではあるが、各浜に「健康づくり」に関する意識が広まっている。

７．今後の課題や計画と問題点

私たち女性部も高齢化が進み、年々部員数は減少しているが、その中で今後も「無理なく負担のない範囲」で精力的に活動を続けていきたいと考えている。特に現在行っている「健康づくり」に関する活動は、平内町漁協合併 50 周年記念之碑（写真－１５）に刻まれている碑文のように「私たちの子供や孫の代まで続くホタテガイ養殖」という私たちの活動目標の礎になるため、今後も町や漁協、県と連携し、自分たちを含めた夫や子、孫、そして各浜へもっと波及させたいと考えている。

写真－１５　平内町漁協合併 50 周年記念之碑

# 奥入瀬川のサケ親魚確保のリスク軽減と早期群造成

- 海と川の絆 -

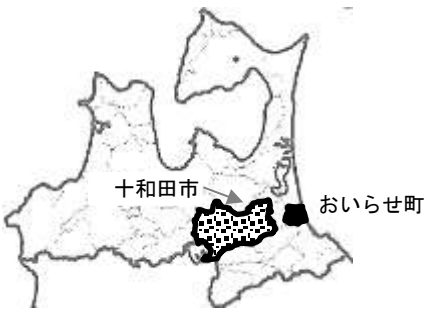
奥入瀬・百石サケマス増殖対策協議会
沖田　考平

## １．地域の概要

十和田市とおいらせ町は、本県の南東部に位置し、十和田市は神秘の湖「十和田湖」を抱え、おいらせ町は太平洋に面している（図－１）。

両市町をつなぐ奥入瀬川は、十和田湖からの唯一の流出河川であり、その河口までの長さは71km と青森県で４番目である。上流は奥入瀬渓流と呼ばれ、その美しさから全国的にも有名な観光地になっている。また、中流域においては、近代都市計画のルーツと呼ばれ、市街地が整然と区画された十和田市があり、隣接する六戸町を経由し、おいらせ町にいたる。そして、毎年 11 月に開催される「日本一のおいらせ鮭まつり」（写真－１）の会場となる下田サーモンパーク、長寿日本一のいちょうの木といわれる「根岸の大いちょう」、更には日本一の自由の女神像で有名な「いちょう公園」の傍を流れ、太平洋に流れ出る。

また、奥入瀬川の河口北側には、百石町漁協の基地となる百石漁港が隣接している。

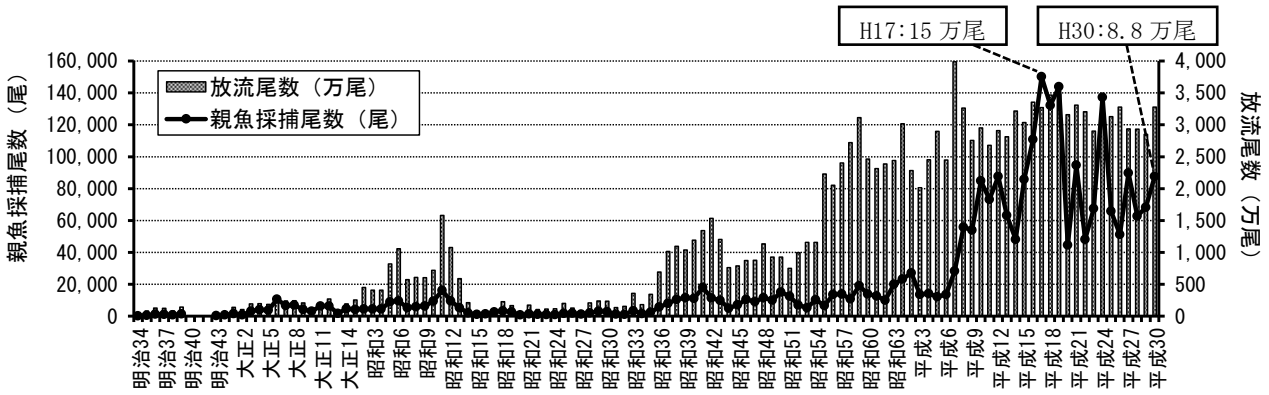



図－１　おいらせ町と十和田市の位置

写真－１　日本一のおいらせ鮭まつり

## ２．漁業の概要

十和田市の奥入瀬川鮭鱒増殖漁業協同組合（以下「奥入瀬川鮭鱒漁協」）は、133 人の組合員からなり、全員がサケマスの増殖事業に携わっている。サケ親魚の採捕数は本州でトップクラスの採捕数を誇っており、平成 17 年度には過去最高の 15 万尾を記録し、平成 30 年度は 8.8 万尾と本州で一位となった。稚魚の放流尾数は県全体の約３割を占め、3,000 万尾を超える水準を維持している（図－２）。また、サケのほかに、サクラマスの増殖事業や環境保護活動にも取り組んでいる。

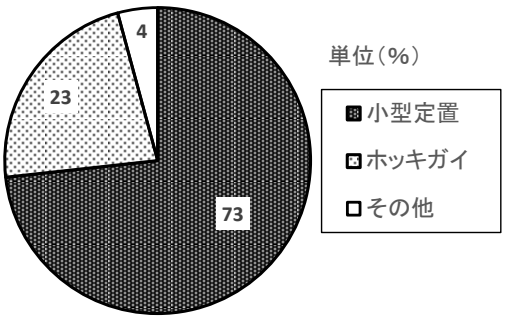



図－２　奥入瀬川鮭鱒増殖漁協のサケ親魚採捕尾数と放流尾数

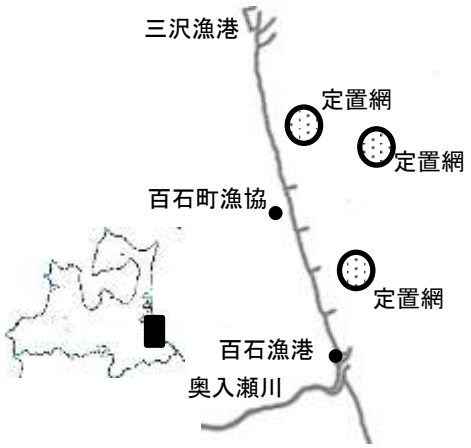
現在のふ化場は、明治 34 年（1901 年）に前身に当たる「青森県水産試験場相坂（おおさか）鮭鱒人工孵化場」として設置されて以来、119 年間続く県内で最も長い歴史を持っている。

一方、百石町漁協は、正組合員 190 人、准組合員 2 人で構成され、主に小型定置網、ほっきがい雑けた網、刺網漁業などが営まれている。ほっきがい雑けた網漁業では、操業時間の短縮や、貝の破損を防ぐために噴流式マンガンを導入したほか、経費削減のために 5 経営体が 1 隻の船で操業する「5 艘（そう）1 艘（そう）」による協業化を進めるなど先進的な取り組みを行っている。

百石町漁協全体の平成 30 年度の水揚げ実績は、数量で 794 トン、金額で 3 億 6,630 万円となっており、このうち小型定置網による水揚げは数量で 475 トン（60%）、金額は 2 億 6,836 万円で全体の 73%を占め（図－３）、組合を支える大きな柱のひとつになっている。現在は、奥入瀬川河口から北のおいらせ町沿岸域に設置された 3 ヶ統の定置網で操業を行っており（図－４）、9 月～翌年 1 月にかけてサケが漁獲される。



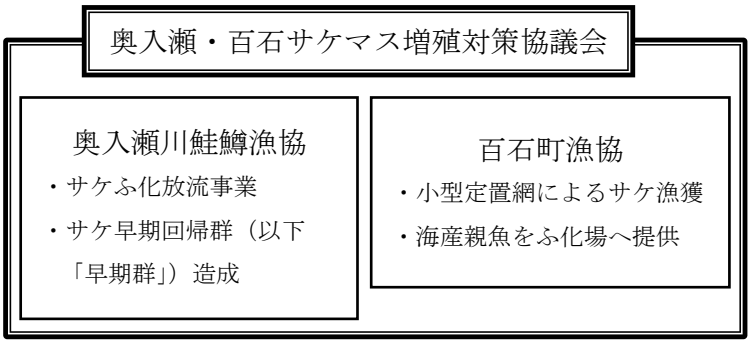

図－３　百石町漁業協同組合の水揚げ金額の割合（H30）




図－４　百石町漁業協同組合定置網の位置

３．協議会の組織と運営

奥入瀬・百石サケマス増殖対策協議会（以下「協議会」）は、十和田市の奥入瀬川鮭鱒漁協のふ化場関係者とおいらせ町の百石町漁協に所属する定置網漁業者で構成されている。協議会は、奥入瀬川のサケマス遡上親魚の増大と沿岸漁業者の所得向上を目的に、平成25年3月8日に設立された（図－５）。会員は、海面の漁業団体である百石町漁協の定置網漁業者を中心としたグループと内水面の奥入瀬川鮭鱒漁協で構成された全国的にも珍しい組織である。また、具体的な活動については、各団体から選出された3人の代表者からなる委員会において決められている。

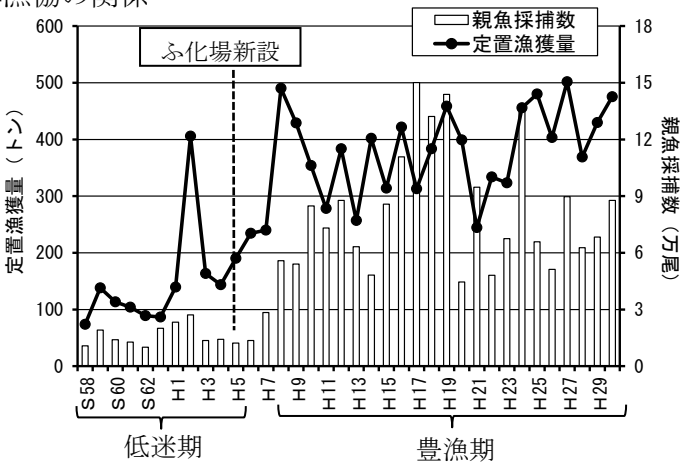



図－５　協議会の組織図

４．研究・実践活動課題選定の動機

（１）百石町漁協と奥入瀬川鮭鱒漁協の関係

昭和 58 年からの百石町漁協の定置網漁業の漁獲量と奥入瀬川鮭鱒漁協の親魚採捕数を見ると、平成5年までの低迷期と平成8年以降の豊漁期に分けられる。低迷期には、平成2年を除いて定置網漁業の漁獲量は200トン以下、また河川のサケ親魚採捕数がおおむね2万尾前後と、ともに少ない年が続いた。




図－６　百石町漁協定置網漁業漁獲量と奥入瀬川のサケ親魚採捕数(S58～H30)

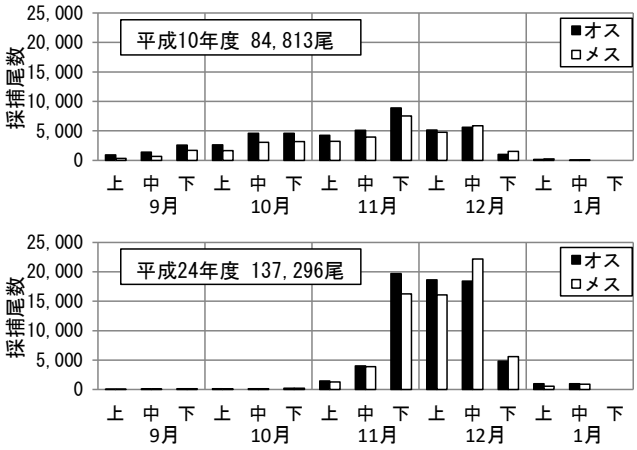
低迷期には、サケのふ化場関係者は、親魚の回帰数が少ない理由を海面漁業者による乱獲が原因とし、一方、海面の漁業者は、サケの漁獲量が増加しないのはふ化場が良い種苗を放流していないことが原因として、互いの信頼関係を築くことはできず、河口海域の操業について何度も争いが見られた。

このような中、奥入瀬川鮭鱒漁協では、平成5年に飼育水に恵まれた切田（きりた）ふ化場を新設し飼育環境を整えるとともに、積極的にふ化放流技術の向上と改善に取り組むことにより、平成8年から遡上親魚数は豊漁期を迎え、平成16年には10万尾の大台を超えるまでになった。また、同じ時期に定置網漁獲量も安定的に300～400トンの漁獲が続くようになってきた。

その後、漁獲量、親魚採捕数とも増加し、平成8年以降定置網漁業漁獲量は約300～500トンで推移し、また河川のサケ親魚採捕数は4～15万尾となり、ともに低迷期の2倍近い数量に増加した（図－６）。

（２）交流のはじまり

漁業を取り巻く自然環境の変動は激しく、大型クラゲの大量発生や東日本大震災の津波による被害、高水温によるサケ回帰時期の遅れによる漁獲低迷など多くの困難な課題が突きつけられ、問題解決のために多くの機関との協力体制をつくる必要性が生じ、平成 20 年 3 月から協議会の前身である奥入瀬川さけます増殖懇談会により、2 漁協の交流がはじまった。



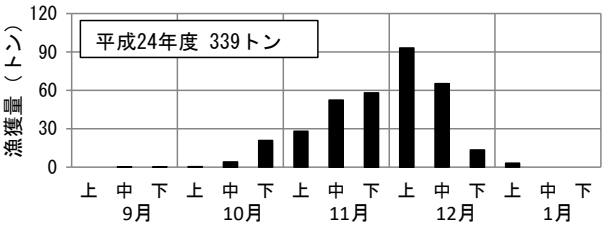

図－７　奥入瀬川のサケ採捕数の変化 (H10,H24)

具体的には、奥入瀬川のサケ遡上は平成 10 年頃までは 9 月から始まり 11 月をピークに 12 月末で終了するパターンを示していた。しかし、その後は、期間後半の 11 月下旬から 12 月に集中するようになり、平成 24 年には 9 月～10 月に遡上する早期群の割合が著しく低くなっていた（図－７）。

奥入瀬川鮭鱒漁協にとって 9 月～10 月に回帰する早期群の増加は、

① 放流時期が早い時期から遅い時期まで採捕が分散され、放流時の環境変化に対する危険分散になる。
② 9 月～10 月の採卵作業は、真冬に比べて作業員の身体的負担が少なくて済む。

という利点がある。




図－８　百石町漁協の旬別サケ漁獲量 (H24)

一方、協議会設立時にサケの主漁期が 11 月～12 月であった（図－８）百石町漁協の定置網漁業でも、早期群は、

① 銀化率が高まり、市場でのサケ単価の向上が期待される。
② 親魚の回帰が 9 月～12 月までの長期にわたり、回帰時期の高水温による遅れや大型クラゲが大量発生した場合の漁業被害などの悪影響を軽減できる。
③ 主漁期が 10 月、11 月に前倒しになることにより、12 月から始まるほっきがい雑けた網漁業と重複する期間が減り、負担軽減につながる。

という利点があり、早期群を造成することは、双方に大きなメリットとなることが考えられた。

（３）海産親魚の提供と協議会設立

早期群造成の効果や百石町漁協定置網漁業者と奥入瀬川鮭鱒漁協関係者双方の理解が進み、平成 24 年から、10 月～11 月上旬に定置網で漁獲されたサケのうちブナ毛（成熟）が進んだメス親魚を定置網漁業者がふ化場へ無償提供し、ふ化場で採卵後、稚魚に育てて放流する早期群造成の取り組みが始まった。その後、平成 25 年 3 月に奥入瀬･百石サケマス増殖対策協議会が設立され、6 年の歳月が経過した（写真－２、３、４）。

写真－２　協議会設立総会集合写真（H25.3）

写真－３　定置網漁業者からふ化場関係者へ海産親魚受け渡し（R1.11）

写真－４　ふ化場飼育池へ海産親魚収容（R1.11）

５．研究・実践活動状況および効果

（１）海産親魚採卵実績

10 月以降に定置網で漁獲された親魚は早期群造成のために、定置網漁業者からふ化場へ、平成 24 年以降継続して年平均 11 回、約 500 尾が無償提供され、ふ化場では約 100 万粒の採卵と約 100 万尾の放流が行われている（表－１）。提供尾数、採卵数および放流数とも増加傾向であり、発眼率はおおむね 9 割を超える高い水準を維持している。

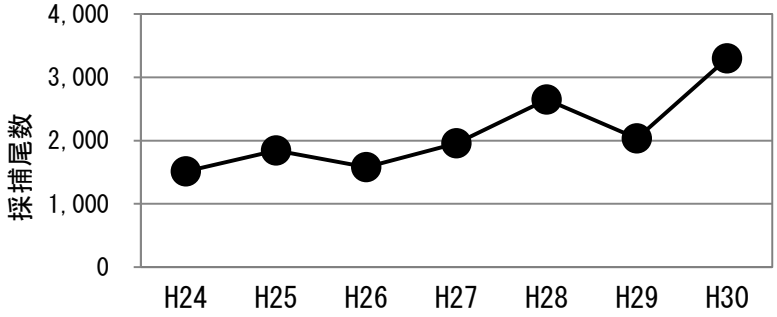
平成 30 年度は提供尾数 779 尾、採卵数 150 万粒、放流数 139 万尾と、いずれも取り組みをはじめた平成 24 年度の約 3 倍となった。

表－１　定置網からふ化場へのサケ親魚提供実績

| | H24 | H25 | H26 | H27 | H28 | H29 | H30 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 提供期間 | 10/27-11/7 | 10/7-11/12 | 10/10-11/12 | 11/11-12/2 | 10/17-11/10 | 11/5-11/20 | 10/24-11/14 | - |
| 提供回数 | 8回 | 14回 | 15回 | 7回 | 13回 | 9回 | 10回 | 11回 |
| 総 尾 数 | 229尾 | 347尾 | 574尾 | 372尾 | 562尾 | 609尾 | 779尾 | 496尾 |
| 採 卵 数 | 52万粒 | 80万粒 | 129万粒 | 60万粒 | 111万粒 | 148万粒 | 150万粒 | 104万粒 |
| 発 眼 率 | 88% | 95% | 91% | 92% | 90% | 92% | 93% | 91% |
| 放 流 数 | 46万尾 | 76万尾 | 117万尾 | 55万尾 | 100万尾 | 136万尾 | 139万尾 | 96万尾 |

（２）奥入瀬川におけるサケ早期群の変化

奥入瀬川で 9 月～10 月に採捕されたサケ早期群は、平成 30 年度は約 3,300 尾と、平成 24 年度の約 1,500 尾の 2 倍を超え、増加傾向であり、取り組みの効果が現れている（図－９）。



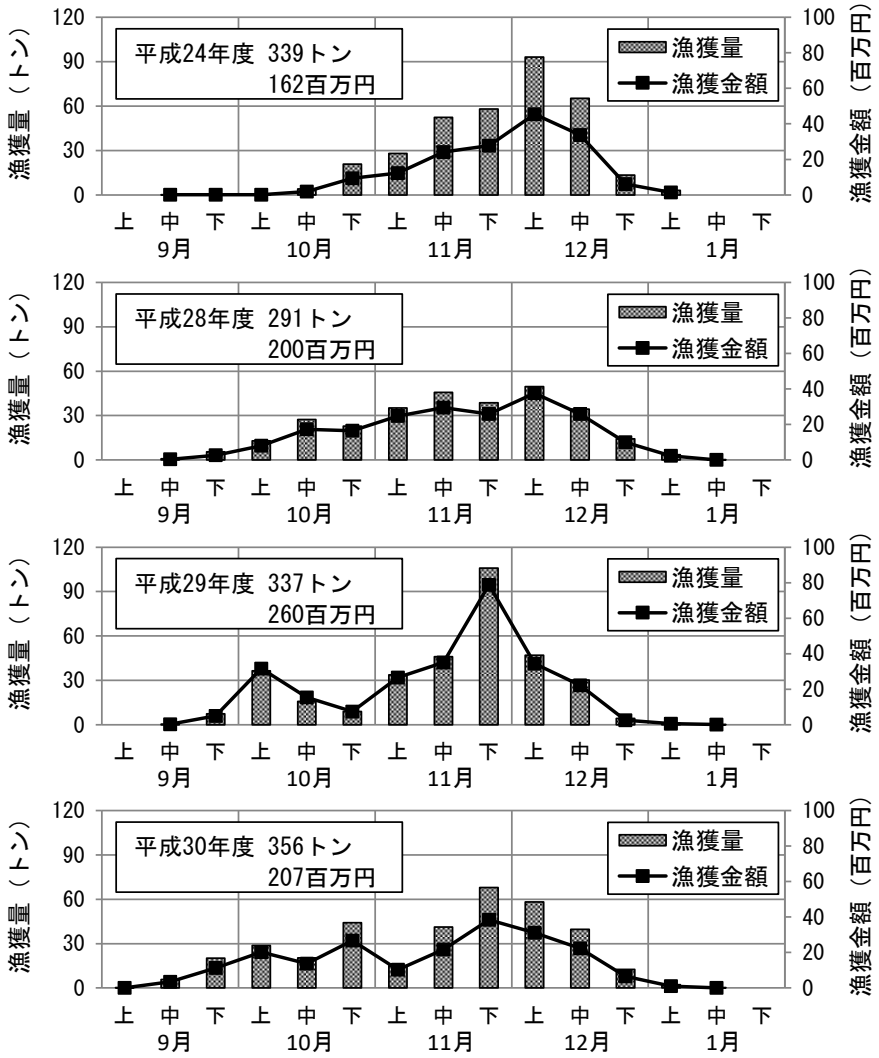

図－９　奥入瀬川における早期群採捕尾数の推移

（３）百石町漁協におけるサケ沿岸漁獲の変化

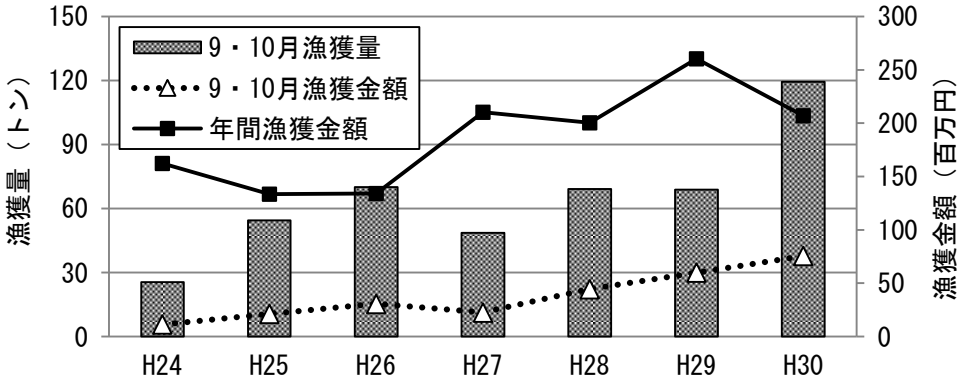
百石町漁協の定置網漁業で漁獲されるサケの主漁期は、平成 24 年度から平成 27 年度まで 11 月中旬から 12 月上旬のピークに集中することが多かったが、取り組みから 4 年後の平成 28 年度以降は、10 月に小さなピークが確認されている（図－１０）。

9 月から 10 月の漁獲量および漁獲金額は増加傾向であり、取り組みをはじめた平成 24 年度は 25 トン、1,100 万円であったのに対し、平成 30 年度は 119 トン、7,600 万円と、大幅に増加している（図－１１）。

また、サケの年間漁獲金額は近年増加傾向であり、9 月から 10 月の漁獲量の増加が漁獲金額の維持・増大につながっている（図－１１）。




図－１０　百石町漁協の旬別サケ漁獲量と漁獲金額の推移



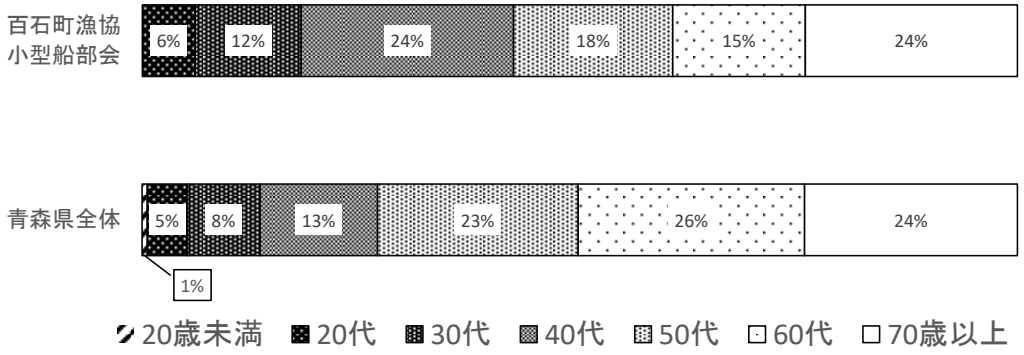

図－１１　百石町漁協における 9・10 月のサケ漁獲量および金額と年間漁獲金額

６．波及効果

この協議会における海面と内水面の組合双方の協力関係を築く取り組みは、新聞などで取り上げられ、少しずつ一般にも知られるようになった。また、県南にはサケ早期群造成が必要とされる河川が奥入瀬川の他にもあり、近隣でも本協議会の活動を参考とし、沿岸漁業者とふ化場関係者との交流が始まっている。

また、早期群の増加により奥入瀬川鮭鱒増殖漁協では採卵作業に余裕が生まれ、全県規模で発眼卵や受精卵を提供し、県全体のサケ増殖振興に寄与している。特に、平成 30 年度に近隣のふ化場で採卵が困難な事態が生じた際には、多くの受精卵を提供して支援し、放流に必要な稚魚の確保につなげている。

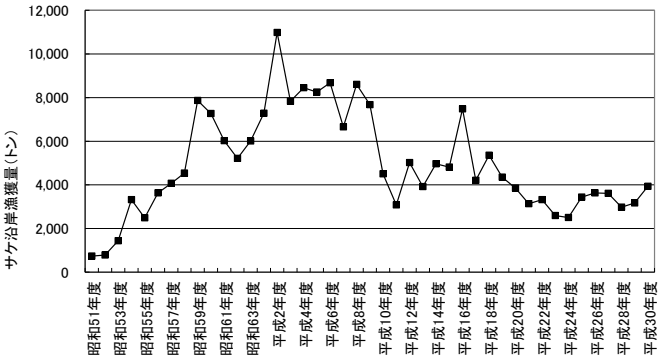
さらに、百石町漁協では、この取り組みとほっきがい雑けた網漁業の協業化が漁業者の収入安定につながっていることから、新規就業を希望する問い合わせが多く、平成 29 年度は 3 人、平成 30 年度は 2 人が新たに着業し、定置網漁業者が所属する小型船部会の年齢構成は、青森県全体における漁業就業者の年齢構成と比べ、若い漁業者の割合が大きく、全体的にバランスが整っている（図－１２）。




図－１２　漁業就業者の年齢構成（H30 年）

７．今後の課題や計画と問題点

平成 10 年以降、青森県では、サケ漁獲量の不振が続いている（図－１３）。この不振は全国的な傾向であり、背景として、回帰時期に海の水温が高すぎることやサケが成長するベーリング海などの環境の変化があると考えられるが、明確な原因は不明である。




図－１３ 青森県のサケ沿岸漁獲量の推移

そのような状況のなかで、サケ資源を増やすために私たちが行うべきことは、早期群から後期群まで、バランスよく健康な稚魚を育て、リスクを軽減しながら沿岸の環境に適した時期に適サイズで放流することであると考えている。

将来にわたりサケがあふれる海と川をめざして、本協議会の取り組みを前進させるとともに海と川の絆をさらに広域に広げていきたいと考えている。

# 車力しじみ生産部会の挑戦

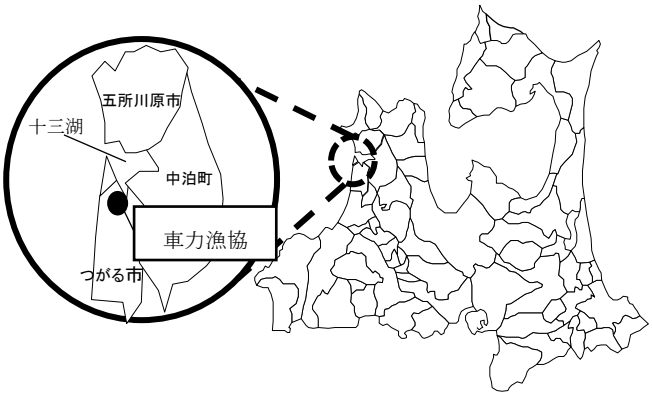
－これまでの軌跡とこれからの展望－

車力しじみ生産部会
成田　邦福

１．地域の概要

つがる市車力地区は、津軽半島北西部に位置し、世界自然遺産である「白神山地」を水源とする岩木川が注がれる十三湖を有している。

また、同市の牛潟地区には、五穀豊穣・海上安全の神様を祭る高山稲荷神社が建立されており、古くから農業・水産業を営む地元民の信仰を集めているほか、千本鳥居の荘厳さに魅せられ、県内外から多くの参拝者が訪れている。中世期においては十三湊（とさみなと）が東日本で最大規模で貿易を行うなど繁栄を誇っていた歴史ある地区である（図－１）。

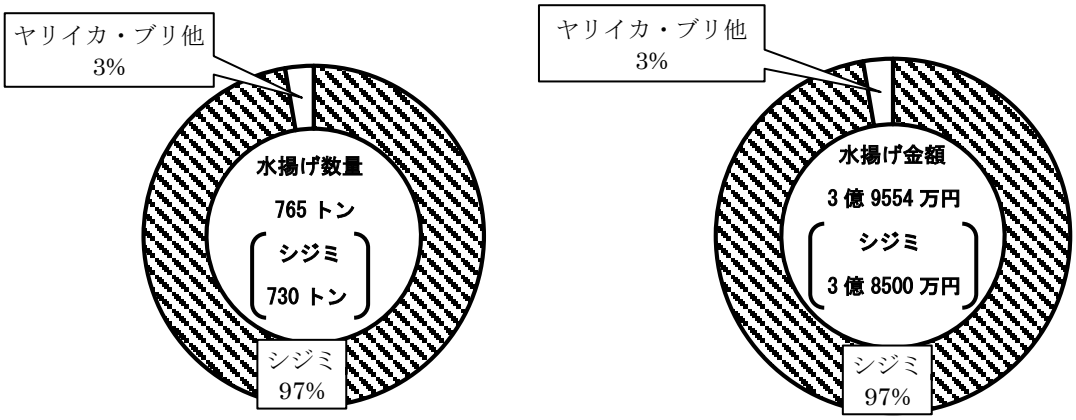



図－１　車力漁協位置図

２．漁業の概要

私が所属する車力漁業協同組合（以下、車力漁協と示す）は、正組合員 100 人、准組合員 175 人の計 275 人で構成され、しじみ漁業を中心とした内水面漁業と底建網・小型定置網を主とした海面漁業が営まれている。

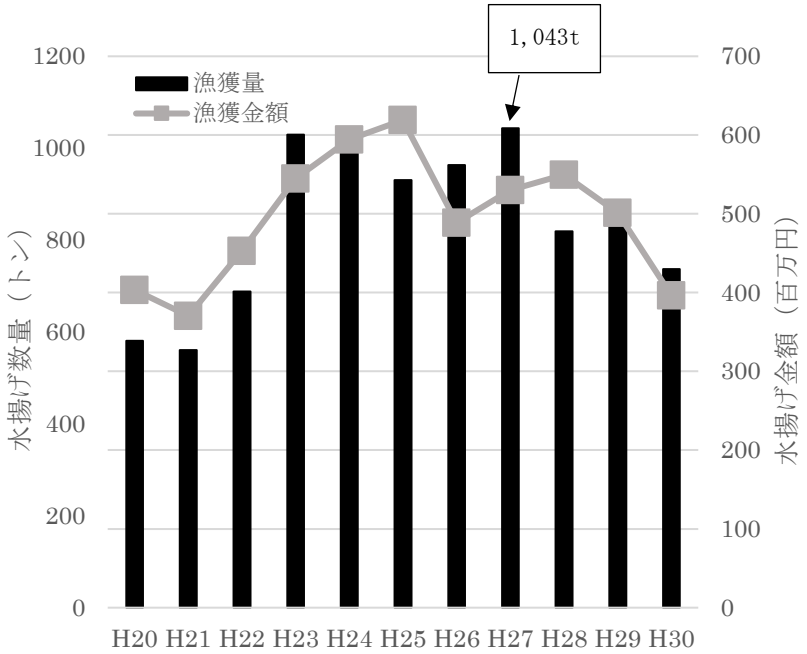
平成30年度の水揚げは、数量は765トン、金額で3億9,554万円となっており、ヤマトシジミ（以下、シジミと示す）が数量、金額ともに全体の97%を占める（図－２）。




図－２　平成３０年度車力漁協水揚げの魚種別割合

このシジミは、平成 29 年 9 月に「十三湖産大和しじみ」として地理的表示保護制度（ＧＩ）に登録され、観光客の消費量増加の一翼を担っている。

水揚げ数量は、平成27年に1,043トンと過去最高を示したが、その後は減少傾向にあり、平成30年には過去5年で最低となっている（図－３）。




図－３　車力漁協の水揚げ量と水揚げ金額の推移

３．研究グループの組織と運営

「車力しじみ生産部会」は、十三湖シジミの安定生産を目指す事を目標に、平成 17 年 4 月に発足した。

部会員は車力漁協に所属しているしじみ漁業者 13 人で構成され、年齢構成は 36～55 歳、平均年齢 47 歳となっている（写真－１）。

主な活動は、シジミに関する試験の実施、先進地研修、組合事業の補助および（地独）青森県産業技術センター内水面研究所と連携した十三湖漁場環境調査である。

写真－１　車力しじみ生産部会

４．研究・実践活動の取組課題選定の動機

（１）「車力しじみ生産部会」の発足（平成17年4月～）

私たちの活動は、平成16年1月に茨城県でシジミの種苗生産が成功したという情報を聞き、十三湖でも種苗生産が出来ればシジミの安定生産に役立つかもしれないと考え、「シジミ生産班」を結成したことから始まる。結成当初は、これまで得ていた情

報や知見を基に有志による集まりで人工種苗生産を試み、親貝の放精・放卵までは成功したものの、受精卵を確認できず失敗に終わり大変悔しい思いをした。そこで、今後の展開について話し合い、「このままではいけない。組合の下部組織として恥ずかしくない活動をしていこう。」と決意した私たちは、規約の制定や、出納管理を行うなどの組織再編を行い、名称も新たに「車力しじみ生産部会」と改名してはじめの一歩を踏み出した。

（２）十三湖シジミの知名度不足について

ある日、部会員の一人が地元の仲卸業者から県外に同漁協産のシジミを売る際、十三湖を知らない人が多いと聞かされた。当時、消費者の健康志向の高まりを受けて、シジミもブームとなっていたため、私たちは単価の向上に喜び、十三湖が全国区になったと思っていたが、実際は単に「シジミ」の価値が上がっているだけで、「十三湖のシジミ」が有名になったことによるものではないことを知った。そこで、高い単価を維持するためには、十三湖のシジミ知名度を高めることが必要と考え、知名度向上および消費拡大に向けた打開策を見い出すため、様々な側面から調査することとした。

５．研究・実践活動状況及び成果

（１）シジミ各種試験

シジミに関する試験は、部会員が漁を行っている中で疑問に思ったことやシジミの安定生産に役立つのではないかと思ったことをテーマに取り上げ、内水面研究所と鰺ヶ沢水産事務所の協力の下、発足当初から毎年行っている。

ア　種苗生産試験

まず、十三湖でのシジミの成長を知るため、種苗生産試験を実施したところ（写真－２、３）、従前の報告によれば出荷サイズ（20㎜弱）までに6、7年かかると言われていたが、調査では大幅に短い約16ヶ月という結果が得られた。

また、普段は水揚げサイズのシジミしか見てこなかった私たちが、この試験を通じてシジミが生まれるところから携わることができ、大変感動するとともに、持続可能な漁業への意識向上にもつながった。

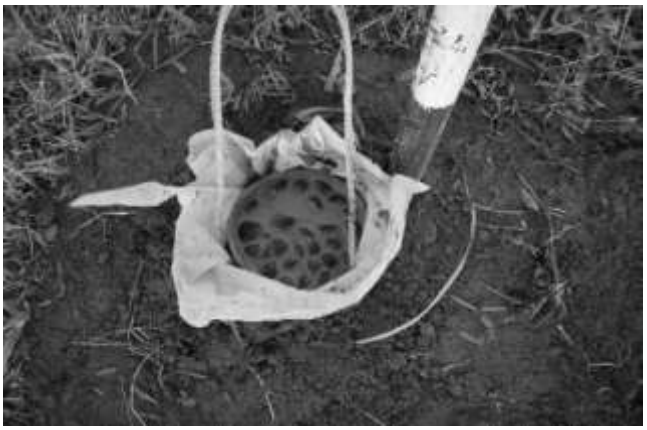
写真－２　種苗生産試験

写真－３　種苗生産試験

イ　冬期間シジミ潜砂深度試験

種苗生産試験に一定の目途が立った頃、漁業者から「冬場にシジミが獲れないのはなぜか。」という相談を受けた。その頃、私たちの間でも今後の試験方針について、次のテーマとして、もっと日常的なテーマにも取り組んでいきたいと考えていたところであったため、「冬場にはシジミはどこにいるのだろう？」という疑問を解明するため、平成27年に冬期間のシジミ潜砂深度試験を実施した（写真－４、５）。

写真－４　冬期間シジミ潜砂深度試験



写真－５　冬期間シジミ潜砂深度試験

底に蓋をした塩ビパイプ（直径10㎝、長さ50㎝）に十三湖から採取した土と水を入れ、その上にシジミ10数個を置いたものを、十三湖内と陸上（組合事務所内敷地）にそれぞれ埋め、11月～1月までの約3か月間経過したのち、取り出してシジミが潜っている深さを測った。

陸上に埋めた理由は、冬期間のシジミが冬眠して土深くでじっとしているならば「回収しやすい陸上に埋めても大丈夫なのでは？」という軽い思い付きからであった。

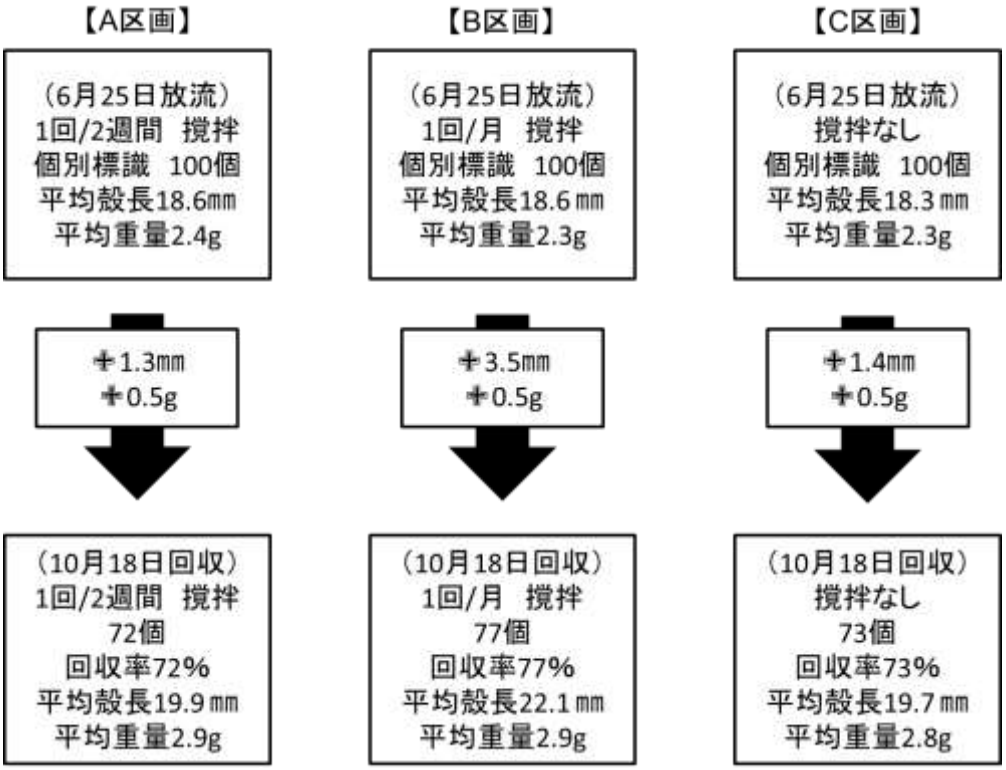
結果は、どちらも8～10ｃｍ程度まで潜っていたことが確認されたが、十三湖内に埋めたパイプの貝はすべて死んでおり、逆に陸上ではへい死が約3割に留まった。思わぬ結果に、私たちも驚いたが、シジミが陸上での試験で生残率が高かった要因を解明していけば、十三湖内の環境変化に対応するうえで有用な基礎知見となり、湖内の環境が悪化した際の対策に役立つ可能性が示唆された。

ウ　撹拌試験（平成 30 年）

冬期間シジミ潜砂深度試験により、これまでの試験と違い、自分たちの身近な疑問を検証することに一つの喜びを覚えた私たちは、新たに疑問を検証する試験を計画した。それは、ジョレンでシジミが生息していると思われる湖底土を掘り起こす作業、いわゆる撹拌作業についてである。これまでは、漁業者の感覚で酸素が土の中に行き届きシジミにとっても成長に良いと考えられているものの、その効果を示すデータはなかった。そこで、私たちは、平成30年に十三湖内における撹拌作業による影響試験を行った（写真－６）。それぞれ撹拌間隔を変えた3区画（A→2週間に1回、B→1ヶ月に1回、C→撹拌なし）を設定し、試験を行った。

写真－６　撹拌試験

撹拌試験の結果を示す（図4）。どの区画も重量に差異は見られなかったが、B区画の殻長は他区画より成長が良い結果となった。将来的にはこの殻長の伸びに付随して重量も増加するのではないかと考え、今後は1ヶ月に1回の撹拌間隔を軸に試験期間や調査項目の見直しを行い、成長に及ぼす影響に関する知見を積み重ねていきたい。




図－４　撹拌試験結果

（２）知名度向上に向けた調査

ア　県内での加工場

平成19年に、県内での十三湖産シジミの流通過程を知るため、青森市のシジミ加工・販売会社へ赴いた。ここでは、安定した生産体制を構築するため、県内産のみならず茨城県や北海道等のシジミも取り扱っていると説明を受け、加工場では十三湖産がレトルトパックに加工される様子を見学した（写真－７）。

写真－７　加工場見学の様子

イ　東京都築地市場

県内の状況を把握した私たちは、次に県外の流通動向を探るため、東京都築地市場を視察した。ここでは、やはり生産量全国1位の島根県産シジミが大部分を占めており、十三湖産シジミの名はどこにも見当たらなかった。目の前で売られていく島根県産シジミを見て、改めて知名度向上のための取り組みをしていかなければと身の引き締まる思いであった。

ウ　島根県宍道湖漁業協同組合

東京での現状を見た私たちは、島根県産シジミの魅力を探るため、これまでに計2回、島根県へ足を運んだ。1回目は、島根県宍道湖漁業協同組合で漁業の現状と取り組みについて説明を受けた。宍道湖でも十三湖と同様に価格の低下やＰＲ事業が課題となっていると知り、同じ悩みを共有しつつ活発な意見交換が行われた。

写真－８　全国シジミ・シンポジウム

2回目は、「第7回全国シジミ・シンポジウムin松江～シジミ漁業の現状と課題～」に参加した（写真－８）。ここでは全国のシジミ漁をしている漁業者から、現状と取り組みが発表され、十三湖での資源管理が比較的進んでいると知り、誇らしく思った一方で、ＰＲ活動の弱さを痛感し、十三湖産の知名度不足対策は急務であると危機感を覚えた。

（３）直売会への参戦

これまでの調査を通じて、ＰＲ活動の必要性を強く感じた私たちは「自分たちにできることは何か」を話し合い、さまざまな意見が飛び交う中で「直売会に参加して消費者の声を聞いてみてはどうだろうか？」という一つの結論に達した。早速、私たちの思いを漁協に伝えたところ、漁協も我々と同様にＰＲ活動の重要性を認識しており、「今度地元の祭りで直売会を予定している。バックアップするからやってみようじゃないか。」と言ってもらい、ＰＲを目的とした漁協バックアップによる直売会に参加した（写真－９、10）。

直売会開始直後、消費者は大きいシジミに目を引かれ、大サイズばかりが売れていった。私たちとしては小サイズのシジミも立派な商品であるので、何とか小サイズも買ってもらおうと考えた末、消費者にシジミを渡す際に砂抜きや保存の方法、シジミのサイズに合った食べ方を伝えるようにした。すると、この取り組みが功を奏し、用意した全てのシジミが完売するほどの盛況となった。この結果から、買った後の家庭内での取り扱いを丁寧に説明すれば、シジミの大小に関わらず販売促進ができるのではないかと確かな手応えを感じた。

写真－９　シジミ直売会の様子

写真－１０　シジミ汁試食会の様子

６．波及効果

これまで勘と経験で行われてきた作業を試験で検証することにより、新たな生産の取り組みのための知見が得られた。例えば、成長試験ではシジミの成長データが得られたので、このデータを参考とした出荷サイズになる時期と単価が上がる時期の検討が示唆された。

撹拌試験では、シジミの成長を促進させる可能性を発見できた。何より、これまで内水面研究所や鰺ヶ沢水産事務所の手を借りながらも、自分たちでテーマを決め、施設を設置して試験を行い、成果を得てきたことは大きな自信に繋がった。

また、先進地調査では県外シジミの実情を知る良い機会になったとともに、調査を通じて、直売会に参加するという新たな活動に繋がった。直売会を行うにあたり、漁協と部会が同じ方向性のもと一体となって活動できたのも大きな成果となった。

実際に直売会に参加してみると、消費者にとって私たち漁業者が話すことは説得力があると感じ、自らが表舞台に立つことの重要性を実感できた。

７．今後の課題や計画と問題点

これまでの取り組みにより、一定の成果が得られた一方で、近年、部会員が高齢で退会する者が増えている中で、若手漁業者の部会への入会がなく、部会員の子供が家業を継いだものの部会には入らないといった事例が出てきており、部会員の減少が懸念される。また、「シジミの安定生産を目指す」という長期的な目標はあるものの、短期的な目標を見つけるのが年々難しくなってきており、部員の活動へのモチベーション低下に繋がっている。

今後は若手にとって魅力ある活動を考えていき、彼らの意見を取り入れて新たな目標作りに活かしていきたい。

# 「海峡ロデオ大畑」の出航
## －漁師から始まる地域振興－

海峡ロデオ大畑
会長　佐藤敏美

### 1. 地域の概要

むつ市大畑町（以下、「大畑」とする）は、津軽海峡を望む下北半島の北辺に位置し（**図 1**）、昭和 9 年に町制を施行し、平成 17 年にむつ市と合併した。

大畑は海、川、山に囲まれた自然豊かな町である。古くから漁業と林業で栄えており、また、薬研（やげん）地区には薬研温泉郷を抱え、温泉の町としても下北の観光の一翼を担ってきた。

**図 1** むつ市大畑町所在地

### 2. 漁業の概要

大畑町漁業協同組合の平成 30 年の漁獲量は 1,137 トン、漁獲金額は 8 億 2,870 万円となっている。主要な漁獲物はスルメイカで、平成 30 年の漁獲量の割合は 27.8%（**図 2**）と大きく依存している。しかし、漁獲量自体は昭和 40 年代を過ぎると大幅に減少し、特に近年では過去に例がないほどの不漁となっている（**図 3**）。

組合員数もピーク時の 1,006 人（平成 9 年）から半分以下の 429 人（正 139 人、准 290 人）にまで落ち込んでいる。

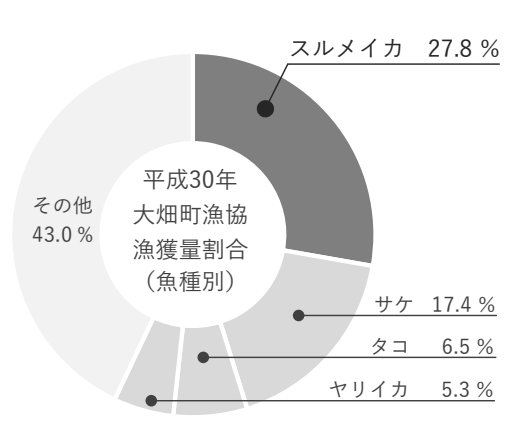



**図 2** 平成 30 年漁獲量割合

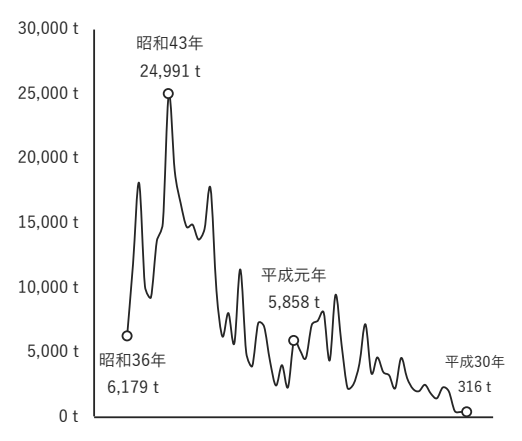



**図 3** スルメイカ漁獲量推移

## 3. 活動取組課題選定の動機

大畑は漁業を基幹産業としている町である。しかし、スルメイカの不漁が続き、漁業経営体や水産加工会社が次々と廃業、町の人口も減少を続けていた。大畑の観光地である薬研温泉郷も客離れが進み、平成 28 年 11 月には薬研温泉郷最大の宿泊施設であった「ホテルニュー薬研」が閉館してしまうなど、このままでは、大畑町の賑わいがますます失われていくのではという危機感があった。

漁業で成り立ってきた町である以上、漁業の衰退は町の衰退となる。また、私は株式会社金亀水産に所属し、大畑の海で小型定置漁業を営んできた漁師である。大畑の魚が美味しいことを知っている。同時に、一回きりのこの人生、なにか楽しいことをしたいと常々考えていた。それも、ただ自分だけが楽しいだけでなく、みんなで大畑に集まって、みんなでなにか楽しいことをしたかったのである。

そのような経緯から、任意団体を設立して、大畑で漁業を使ったイベントを実施し、水産業の普及、大畑の賑わい創出を目指すこととした。

## 4. 実践活動状況及び成果

### (1) 海峡ロデオ大畑の設立

私は漁師であるので、魚を獲ったり網を直したりすることは得意であるが、イベントの企画や資料の作成、会議の設定、その他必要な手続きなどについては知識がなかった。漁業を中心とした町おこし団体も大畑には前例がない。

しかし、幸いにも、同級生がむつ市役所に勤務していたことや、町おこしグループ「イカす大畑カダル団」に所属していたことから、彼らと、漁師仲間である濵田一歩（はまだかずほ。小型定置漁業者。株式会社金城水産の船頭を務める）と話し合いをし、水産業だけでなく観光業からも協力者を募り団体を設立することとした。

図 4 ロゴ

協力者には実際に網起こしを体験してもらい、意見交換や打ち合わせにも参加してもらった。その過程で団体の具体的な活動内容が議論され、平成 30 年 2 月、水産業の普及、大畑の賑わい創出を目的とした任意団体「海峡ロデオ大畑」が設立された。この名称は、津軽海峡の荒波や魚を暴れ馬にたとえ、乗りこなす（ロデオする）ことに由来するもので、団体のロゴもそれにちなんだものとなっている（図 4）。

海峡ロデオ大畑は、会長は私佐藤敏美、副会長は濵田一歩（以下、副会長）が務め、この 2 人の漁師を中心に、漁業者、漁協、行政（市役所、県水産事務所）、観光関連団体、町おこしグループ、寺、神社と官民を問わない組織・団体で構成されており（表 1）、後述の漁獲体験ツアーやグッズ販売などの活動を通して、大畑を盛り上げようという団体である。

表 1 海峡ロデオ大畑構成メンバー

| 水　産 | | 観　光 | その他 |
|---|---|---|---|
| 民　間 | | 民　間 | 民　間 |
| 大畑町漁業協同組合 | （株）金亀水産 | （一社）しもきたTABIあしすと | イカす大畑カダル団※2 |
| 定置網組合 | （株）金城水産 | | 大畑町商工会 |
| 北彩漁業生産組合 | （株）浜照水産 | | 大畑八幡宮 |
| 行　政 | | 行　政 | 大安寺 |
| 青森県むつ水産事務所 | むつ市大畑庁舎 | むつ市観光戦略課 | |
| むつ市生産者支援課 | | むつ市ジオパーク推進課※1 | |

※1 下北ジオパーク
ジオパークは大地・自然・生活・文化のつながりを学び楽しめる場所とされ、青森県下北半島は平成28年に認定。また、パーク内の特徴的な場所をジオサイトという。

※2 イカす大畑カダル団
有志の町おこしグループ。薬研温泉カフェkadarの運営のほか、薬研地区を中心にイベントの企画・運営を行っている。

### (2) 漁獲体験ツアー

漁業を知ってもらいながら楽しめるイベントとして「漁獲体験ツアー」を企画し、これまでに通算 4 回実施している（表 2）。4 回ともに共通して行っている主要企画の詳細を後述する。

表 2 漁獲体験ツアー実施状況

| | 日　付 | 参　加 | 主要企画 | その他企画 | 内　　容 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第1回 | H30.4.7<br>～4.8 | 13人 | 網起こし体験<br>魚市場見学<br>捌き方実演<br>漁師トーク | 昼　食<br>街歩き | サーモン食べ比べ膳を提供<br>大畑八幡宮の見学など |
| 第2回 | H30.10.26 | 10人 | 網起こし体験<br>魚市場見学<br>捌き方実演<br>漁師トーク | 昼　食 | アキザケ親子丼を提供 |
| 第3回 | H31.4.28 | 23人 | 網起こし体験<br>魚市場見学<br>捌き方実演<br>漁師トーク | ワカメ収穫体験<br>海峡サーモン餌やり体験<br>海峡サーモン一本釣り体験<br>魚重さあてクイズ | 定置網の縄に繁茂したワカメを収穫<br>沖のイケスで実施<br>ツアーのオプション。釣った魚は持ち帰り<br>網起こし体験で漁獲したサクラマスを使用 |
| 第4回 | R1.11.2 | 15人 | 網起こし体験<br>魚市場見学<br>捌き方実演<br>漁師トーク | タコつかみ取り体験<br>抽選会 | 初獲れのマダコ・ミズダコを使用<br>景品は網起こし体験で漁獲した魚を使用 |

### ア 網おこし体験

参加者は 2 組に分かれ、定置漁船の第六十八金亀丸・第十八金城丸にそれぞれ乗船し、実際に操業に使用している小型定置網に向かって出航する。途中、平成 28 年に認定された下北ジオパークのジオサイトである赤岩、ちぢり浜が見えるので、添乗しているむつ市ジオパーク推進課職員の説明を聞き、ジオサイトへの理解を深めてもらう。網に到着後、参加者は私や副会長の掛け声とともに網起こしを行う(**写真 1**)。水揚げした魚を実際に触ってもらい、仕分け作業を手伝ってもらう。参加者がサケやマスを掴みそこねている様子や、イカに墨をかけられる様子が見られ、大いに盛り上がる。

**写真 1** 網起こし

**写真 2** ロデオの様子

帰りは 2 隻で並走するなど、荒波に揺られながら（＝『ロデオしながら』）帰港する（**写真 2**)。

網起こし体験は、漁獲体験ツアーの軸となる企画である。ほとんどの参加者は漁船に乗ること自体が初めての経験であり、漁船から見える景色や船の揺れ方、生きた魚の力強さ、そして何よりも船上での漁師の仕事を直に体験できる貴重な機会として好評を得ている。「次は実際に漁が行われている時間に体験したい」という意見も聞かれ、本企画を通じてより強く漁業に関心を持ってもらえたものと手応えを感じている。

### イ 大畑町魚市場見学

現在の大畑町魚市場は老朽化していた旧魚市場に代わって平成 30 年 4 月から稼働した新しい施設である。帰港後は、この施設を利用した企画を実施している。

**写真 3** 荷受け見学

参加者には、荷受けから威勢の良い掛け声が飛び交う入札まで、魚市場の賑やかな様子を見学してもらう。地元からの参加者でも「建物の外観は知っていても、その中で何が行われているかまでは知らなかった」という感想を述べており、本企画では、通常では目につきにくい魚市場の役割について理解してもらうことができた。

ウ 魚捌き方実演

魚捌き方実演を行うのは、北彩漁業生産組合でブランド魚「海峡サーモン」の養殖業・加工業に携わっている濵田勇一郎組合長である（以下、組合長）。捌く魚は主にサケ・マス類で、網起こし体験で漁獲したものを使用する。私と組合長で掛け合いをしながら捌いていき、塩焼きにするための下処理まで行う。組合長の見事な包丁捌きに歓声があがり、また、掛け合いが面白いとの感想も聞かれた。魚の捌き方は参加者がツアー後も自分で実践できることから、漁獲体験ツアーでは外せない企画である。また、組合長にはツアーの昼食として『サーモン食べ比べ膳』を用意してもらったこともある。海峡サーモン、サクラマス、アキサケ、トキシラズの刺身を食べ比べられるのは大畑ならではであり、捌き方実演と合わせて参加者への魚食普及に繋がった。

**写真 4** 魚捌き方実演

エ 漁師トーク

漁獲体験ツアーは最後に宴会を行う。この宴会では金亀水産、金城水産が事前に提供した魚介類や、前述の捌き方実演で切った切り身を利用した料理の提供が行われる。参加者は自ら獲った魚の料理を楽しみながら、私や副会長と「漁師トーク」を行う。

漁師トークは質疑応答形式で進行し、普段の漁師の生活や操業中に起きた出来事などを話したり、参加者からの質問に答えたりしながら交流を深める。参加者だけでなくスタッフともども大いに盛り上がって大宴会へと発展するのが恒例であり、ツアーの最後にふさわしい企画である。ある宴会場の従業員が言った「大畑の夜がこんなに賑やかなのは久しぶりだ」という言葉は今も心に残っている。

(3) グッズ販売

海峡ロデオ大畑の知名度アップと収益増加を目的として、Ｔシャツ（通称「ロデオＴシャツ（**写真 5**）」）、あたりめ、さきいかといったイカ加工品（通称「烏賊ロデオ珍味（**写真 6**）」）を制作した。これらは漁獲体験ツアーや地元イベントで販売したほか、ロデオＴシャツはむつ市内 3 店舗で店頭販売してもらった。ロデオＴシャツは 1 年間で 500 枚以上を販売し 40 万 8,186 円の売上げ、烏賊ロデオ珍味は全 100 個を完売し 5 万 800 円を売上げ（平成 30 年度決算時点）、どちらも予想以上に売れたことから、増産して販売を続けている。

特にロデオＴシャツは、当初はツアーのスタッフＴシャツ、参加者へのお土産用として少数のみ制作していたが、スタッフやツアー参加者以外からの購入希望が多く寄せられたため増産し、一部店頭での販売も依頼することとなった。

写真 5 ロデオＴシャツ

写真 6 烏賊ロデオ珍味

### (4) 活動を通じて

第 1 回目のツアー前は、私を含め海峡ロデオ大畑メンバーは不安な思いを口にしていた。入念な準備をし、マスコミにも取り上げてもらっていたが、実際に参加者が集まるかは分からなかったからである。しかし、第 1 回目のツアーでは 13 人の参加者が集まってくれた。これまでの通算参加者数は 61 人である。開催費用も補助事業を利用したのは初回のみで、それ以降は海峡ロデオ大畑単独の予算で賄っている。毎回欠かさず応募してくれる人、県外から家族連れで参加してくれた人もいて、水産業の普及、大畑の賑わい創出に貢献できていると感じられたことは、今後も海峡ロデオ大畑の活動を続ける自信となった。ロデオＴシャツも、今では大畑のみならず下北半島全域で誰かが着用しているのを見かけることがある。

いつも積極的に協力してくれる海峡ロデオ大畑のメンバー、ロデオＴシャツを購入し陰ながら支援してくれた人たち、なにより、海峡ロデオ大畑を見つけて大畑に足を運び、私たちとともに大畑を盛り上げてくれた参加者に心から感謝したい。

## 5. 波及効果

海峡ロデオ大畑の活動がほかの団体に注目されはじめ、イベントや講演会などへの協力を依頼されるようになった（**表 3**）。大畑の外からも依頼があり、認知度が徐々に上がっていることを実感した。また、これらの活動から海峡ロデオ大畑を知り漁獲体験ツアーに応募したという参加者もいて、大畑や漁業のＰＲの場としても効果があった。

**表 3** 他団体主催企画への参加状況

| 日　付 | 主　催 | 企画名 |
|---|---|---|
| H30.9.5 | 青森県漁協青年部連絡協議会 | 平成30年度青森県漁業青年部連絡協議会研修会 |
| H30.9.13 | 青森県漁港漁場協会 | 平成30年度青森県漁港漁場整備事業研修会 |
| H30.12.1 | 下北ジオパーク推進協議会 | 第2回下北ジオパーク学習・活動発表会 |
| R1.7.13 | むつ市青年会議所 | 下北体感サバイバルキャンプ |
| R1.9.25 | むつ市 | 飛鳥Ⅱ歓送迎イベント |
| R1.10.1 | 青森県下北地域県民局 | 知事との元気まるごとトーク |

## 6. 今後の課題や計画と問題点

### (1) 課　題

今までの漁獲体験ツアーは天候に恵まれてきたが、出航できないほどの悪天候時であっても中止にすることなく参加者に満足してもらえるような企画を準備する必要がある。

また、これまでの漁獲体験ツアーの参加者は平均 15 人程度であるが、1 回あたりの定員にはまだ余裕がある。実際、参加者から「せっかく良い企画を行っているのにＰＲが足りないのではないか」という指摘もある。漁獲体験ツアーの主な告知は「しもきたＴＡＢＩあしすと」および海峡ロデオ大畑のフェイスブックページにて行ってきたが、今後は参加人数増加に向けてＰＲにも力を入れる必要がある。

### (2) 計　画

#### ア 課題の解決に向けて

悪天候でも参加者に網起こしや釣りを体験してもらえるよう、小型生簀の入手を検討している。

これは他団体主催企画の「下北体感サバイバルキャンプ」において、借りた生簀を用いて漁港内で実施した網起こし体験を基にしている（**写真 6**）。

**写真 6** 子どもが網を引く様子

そのときは、子どもたちが漁業や生きた魚に触れられる貴重な機会だと好評だったので、子ども向けの内容も考案し、いずれは水産教室などの担い手確保の活動にも繋げていきたい。

ＰＲの拡大については、「知事との元気まるごとトーク」のときに県の観光企画課の職員から、「まるごとあおもり情報発信グループ」のフェイスブックやインスタグラムなどの利用が可能とのアドバイスをいただいたので、今後はそれらを利用させてもらい、全国的な規模の告知を行うようにしたい。あわせて、動き出しを早くし、ＰＲ期間、募集期間を長めに確保するよう努めることとする。

#### イ 今後の活動について

下記のことを予定・検討している。

（ア）薬研温泉郷で開催されるイベントへの参加

（イ）今年度 10 月から開催されている大畑漁港朝市での網起こし・釣り体験

（ウ）来年度 5 月の大型連休に通算 5 度目となる漁獲体験ツアー開催

（エ）海峡ロデオ大畑のホームページの作成

いずれも現段階で検討されているものであり、他にも参加・実施可能な企画があれば積極的に実行に移し、大畑の漁業振興・町の賑わいづくりに貢献していきたい。

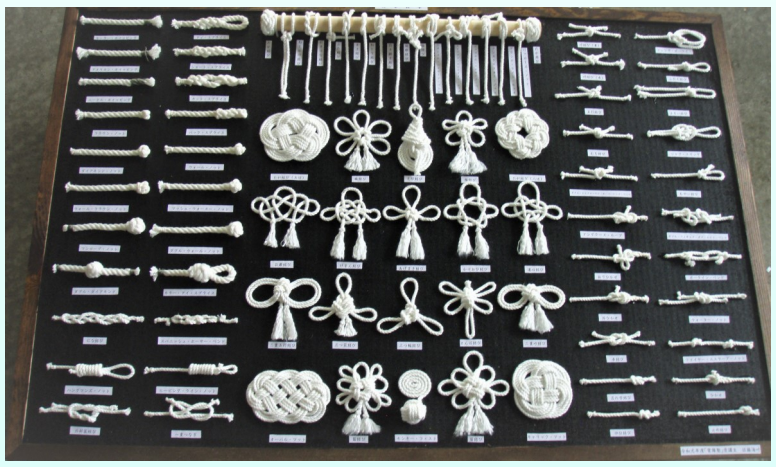
# 漁業後継者育成研修

# 賓陽塾（ひんようじゅく）

## 令和２年度受講生募集のお知らせ

**【研修内容】**

**１　漁業基礎研修　（６月～７月：水産総合研究所）**



・水産知識　漁業関係法令・制度、栽培漁業・資源管理
簿記漁業経営、ホタテガイ養殖、漁獲物の鮮度保持

・漁業技術　ロープワーク（各種ロープさつま加工）
沿岸漁業実習（かご、さし網、釣り）
ホタテガイ養殖（試験船なつどまり）

・視察研修　県内の水産関連施設

**２　資格取得講習　（８月～１１月：各講習開催場所）**

一級・二級小型船舶操縦士（※）、第三級海上特殊無線技士、潜水士

※一級・二級小型船舶操縦士資格取得講習を受講するには、漁業基礎研修を受講することが条件となります。

**【募集要項】**

**募集人員**：１０名程度

**通学方法**：各自交通手段による通学制（水産総合研究所で行う研修を受講する場合は、同所内宿泊施設の利用も可能）

**受講料**：無料（資格取得のための経費は各受講者が負担）

**応募資格**：県内の漁業後継者または県内の漁業へ就業を希望する者（性別・年齢不問）

**受付期間**：令和２年２月１日～３月３１日

## 随時受付

**出前講座**

対象：県内の漁協青年部や漁業研究会等の団体　　開催人数：１０名程度　　開催場所：現地

内容：各種ロープワーク（さつま加工等）、水産知識（座学）　　開催期間：８月～３月

**《お問い合わせ》**


青森県農林水産部水産局水産振興課企画・普及グループ　電話:017-734-9592
地方独立行政法人青森県産業技術センター水産総合研究所　電話:017-755-2155
東青地域県民局地域農林水産部青森地方水産業改良普及所　電話:017-765-2520
三八地域県民局地域農林水産部八戸水産事務所　電話:0178-21-1185
西北地域県民局地域農林水産部鰺ヶ沢水産事務所　電話:0173-72-4300
下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所　電話:0175-22-8581